算命学中庸

【初年】６６回目

６６回目の授業はこのページからです。

授業科目　　〖天中殺の心得〗（４）最終回

✏ 天中殺とは「自分の運勢を調整する時期」です。
天中殺があるおかげで、運勢を調節できます。
「自分は運勢に外れていたのでは……」と考えるのであれば、元へ戻(もど)そうとするのか、あるいは、もっと外してしまう。そのどちらかになります。
調整・調節する必要のない人は、天中殺が来ても、禍がでないのです。その人は、自分ができ得(う)る限りに、宿命どおりに生きている人です。

天中殺には運勢を調整・調節する役割的な部分があるわけです。
天中殺が来ているのに、新しいことを始めると、運勢をととのえる時間がなくなるのです。

参考・調整〔ものごとの過不足をなくし、正しい状態にする〕

参考・調節〔ちょうどよく、つりあいがとれるようにする〕

天中殺という運勢を調整する時期に、新しい物事を始めると問題が出ることになります。
天中殺に入る前に、なにか問題が起るとかです。
身体の状態が悪くなるとか、これも天中殺に入る手前の一つの過程といえます。

天中殺に入ると問題がでる人、あるいは、天中殺が終わってから問題が出る人もいます。
必ず、天中殺の期間中に問題が出るということではありません。時間差が横たわっています。

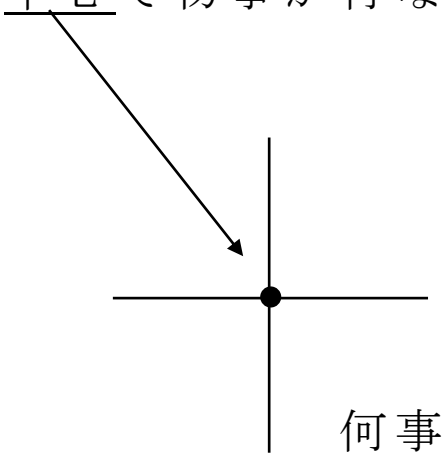
Ⓐ 天中殺になる前に問題が出る人

Ⓑ 天中殺に入ってから問題が出る人

Ⓒ 天中殺が終わってから問題が出る人

これらは全て運勢の調整・調節と考えています。

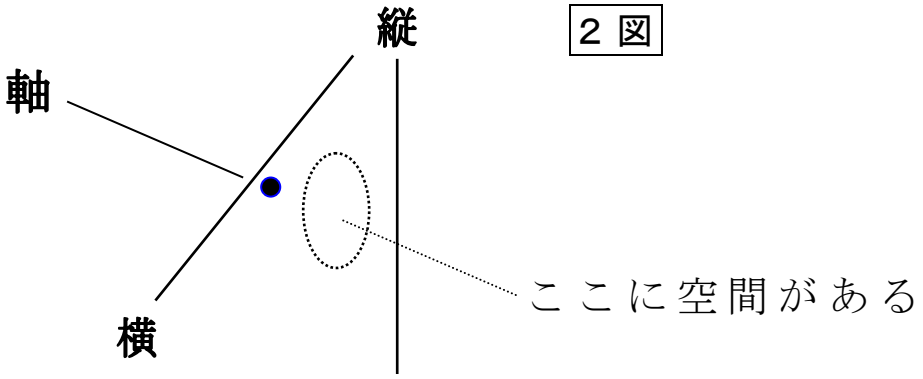
☞ 物事というのは、縦軸があり、横軸があり……
その中心で物事が行なわれています。



１図

何事もそうです。

上の図は、上から見たときの図ですが、天中殺の時期というのは、下の図のように縦軸と横軸の交差がずれています。



２図

縦軸と横軸が重なっていないで、隙間が空いているのです。（正確に交差していないのです）
表面から見ると重なっています。１図
横から見ると重なっていないで離れています。２図
これが天中殺の姿です。

表面から見ているので、十字に重なって見えているのですが、横から見ると重なっていないので、やる事・成す事がまとまらないのです。
天中殺のときは、やる事、成す事がまとまっていないと理解するとよいでしょう。

そのような天中殺の時期に物事を起こすと、まとまりがないわけです。当然、不自然でまとまらないということが起るのです。
それでも人間は自分の意志があるので「天中殺なんて関係ない」として、一生懸命やるわけです
そして、出来るとすれば（出来ないとは言えません）自分の肉体と精神に、何十倍もの負担がかかることになります。

基本的には天中殺で物事を起こしたら、「物事がまとまらない（不自然＝ずれる）」と考えています。
天中殺で起こしたことは、まとまらなくて当たり前なのです。
「天中殺はまとまりませんよ」と言っているのに自分の努力で、天中殺の期間にまとめてしまうと、自身の肉体・精神にその影響を及ぼします。

「まとまった……」としても、何十倍もの負担がかかって疲れます。その結果として「命を縮める」ことにもなるわけです。
そのように考えています。

「なにが天中殺よ、成功している人もいるわよ」という話は……実際にあります。
算命学は当たらないと思うわけです。
ところがそうではないのです。

そのときは成功しました。
成功したとしても、その後の時間経過があります。
そこには時間差があります。
天中殺の時期が終わった後も……その人は生きて人生を歩んでいるわけです。
時間差があっても、いずれは天中殺のしわ寄せが来ると考えています。
成功の度合いによって〔病気になる〕とか、ときには〔命を縮める〕ということも起ります。
その人自身に起きなくても、誰かに起るのです。
運勢というのは、一点だけに起きるのではないのです。必ず、連続性のなかで起きて来るのです。

〔たとえば〕身体の具合が悪い……とおもって医者に行ったとします。
検診の結果、医師に「あなたは悪性腫瘍」です。と診断されたとします。
そうなると、自分はいきなりガンになったような気がしますが、１ヶ月やそこらで悪性腫瘍が形成されたのではありません。
そうなるには長い時間の経過が存在して、結果的にガンと宣告されたわけです。

〔たとえば〕風邪をひいて、熱がでて、喉や関節に痛みがあっても、その痛みが止まってしまえば、「ああ治った」と想うわけです。ところが実際は治っていないために、再発ということが起ります。

ストレスやタバコなどの弊害（へいがい）によって、組織細胞が傷めつけられても、本人に自覚症状がなければ病院へ行きません。
また、病院に行って検査を受けても、なにも出ないことも多々あるわけです。
「気のせいだ」と安心して……悪癖（あくへき）を繰り返していれば、どんどん組織細胞は傷めつけられます。

ついには、自然治癒力が限界に達し、退化的症状へと悪化して、細胞がガン化するわけです。

人生は線香花火（せんこうはなび）のようにパチパチとして、消えてしまう時間の経過ではないのです。
天中殺に入る前の時間の経過も存在し、生きている限りは、天中殺が終わってからも時間の流れは続きます。

〔たとえば〕「天中殺で結婚しましたけど、私たち離婚していませんし、仲もいいですよ」と、いうご夫婦がいたとしても、そのしわ寄せはどこかに行っているのです。
自分たちだけの問題ではなくて、親とか、子供とかに、シワ寄せがゆきます。
あるいは、そのご夫婦に子供が生まれないとか、なにかしらの問題が起こっても当たり前であり、起らないわけはないのです。

それゆえに、「私たちとても夫婦仲が良いの」と、いう現象だけで、判断はできません。
どこかに現象が出てきます。

そうしますと、天中殺のときに新しい事を始めると、どうなるのか……という話になるわけです。
天中殺は、物事をまとめることが出来ない時期ですから〔まとめられない事柄〕〔まとめる必要のない事柄〕であれば、始めてもよいし、やってもよいということになります。
（しかし、無理に始めることはないのです）
言い換えれば、やった事柄の結果を見る必要がないことなら構いません。

参考・事柄〔事の内容。ことの有様〕

参考・物事〔思考・行動の対象になるすべて〕

〔たとえば〕初めて絵を描き始めたとします。
まとめる必要がないという意味は、それを販売するとか、展示会で発表するとかの目的・行動をもたないで、自分だけの価値観の世界にいる限りは、天中殺で始めても構わないのです。

〔たとえば〕旅行に行くにしても、なにかの物事に対する目的をもつことなく、「疲れたから気分転換で２～３日旅行する」というのであれば結構です。

自分を忙しさから解放することで、気分をさわやかにして、精神・肉体の元気を取り戻すためということなら構いません。

それで運勢を調整・調節するのであれば構わないのです。

☞ なにか仕事を始める……？

“始める”というのは、なにか新しい物事をはじめるという意味です。
新しく始めた仕事が、自分の生涯を左右するものはダメです。
〔たとえば〕大手の会社に入社しても……その会社に存続して、仕事をするということなら、天中殺で入社するのは止めてほうがよいです。
一流会社であろうと、三流であろうと、天中殺でその会社に就職したという場合には、その仕事を生涯貫くことは難しいのです。

どういう意味なのかといえば……会社に就職しました。その後「会社から辞めてくれ」といわれたのであれば、その禍（わざわい）は相手から受けたものですから、会社を辞めればよいのです。
あるいは、自分が身体を壊してしまい、結果的に辞めるような事態になることも起り得ます。
〔会社から辞めてくれと言われるのか〕あるいは、〔自分が身体を壊して結果的に挫折する〕という現象なのか、具体的にどのような事象が起こるのか……わからないのです。

そうしますと、天中殺の禍（わざわい）を回避するという意味でいえば〔一生その会社に勤め上げる気持ちがないのなら、入社しても良いのか……〕ということになりますよね。
２～３年で辞めるのであれば良いでしょう。
しかし、15～20 年も会社に在籍していて、長期間に渡って仕事をやるのであれば、一時的は腰掛け仕事とはいえませんし、「天中殺で新しい仕事を始めました」と、いう事実は、人生の変化過程として刻（きざ）まれます。

今度は「天中殺でない時期に物事を始めました」ということであっても、以前に、天中殺で物事を始めたという事実が、人生の過程に刻印されているために、つぎの仕事がうまくいかなくなってしまう。ということが起こります。

〔たとえば〕「天中殺で結婚しました」そして、離婚しました。
つぎに「天中殺でないときに結婚しました……」
そのようにしても、最初に天中殺で結婚した事実は、その人の人生の歴史に残ってしまうのです。

それゆえに「２度目の結婚は、天中殺でないときにしました」といっても、その結婚も自分が想うように順調にはいかないのです。
人生の過程では、結婚というテーマでつながっているからです。
「……それなら相手が変わればいいじゃない」
「……時期が変わればいいじゃない」ということになるわけです。
しかし、自分の人生の過程のなかで「以前に……天中殺で結婚して、離婚した」その刻印（こくいん）は残っています。天中殺で結婚しても、離婚しても、人生の記録として、潜在意識（せんざいいしき）に記帳されています。

それゆえに「今度は天中殺の時期を、全部、はずして、物事をやったからうまくゆく」と、想ってもそうはいかないのです。
そのことからして、
「天中殺でないときに結婚した人」
「天中殺でないときに離婚した人」
「天中殺のときに結婚した人」
「天中殺のときに離婚した人」
これらの人の人生の内容はまったく違うのです。

☞ 天中殺で〔起きた・起きる〕さまざまな事象に取り組むには……。

20 代、40 代 50 代と、年代の経過のなかに、人生における過去の歴史が存在します。

過去に起こった事象の部分を除いて、現在(いま)の自分は存在しないのです。潜在意識に刻印された過去の事象は、永久に残ります。霊魂(れいこん)にも残存します。

天中殺で病気を患(わずら)ったのであれば、それは後遺症として残っているのです。現在(いま)はなんともなくても、必ず、後遺症として残ります。

〔たとえば〕大学に入れば、天中殺であろうと専攻した課程を学びます。

その専門分野においては、自分の生涯にわたって、目的を達せられないと考えています。その学問を自分の生涯の仕事としてできないわけです。

〔たとえば〕大学を卒業するときが、天中殺だとすれば、仕事を始めるときに天中殺に入ります。

運が悪いとえますが、そのようなときには、時期を外(はず)さないと駄目です。

〔たとえば〕法学部を卒業しました。
国家試験に合格して、天中殺で弁護士になったとすれば、弁護士の仕事で、なにかしらのいざこざ・やっかいなことが起こるといえます。
それゆえに、弁護士にならないほうが運は良いといえます。
つまり、天中殺で大学に入ったときは、その専攻学問を生涯の学問とすることはできないと考えています。
その学問の関連で問題が起こることになります。

〔たとえば〕天中殺のときに医学課程を専攻して、卒業後、医師免許も取得して医師になりました。
それで開業しても、順調にはいかないのです。
あるいは、卒業するときに、天中殺の時期が重なるということもあります。
大学を出て、始めて勤めるわけですから、一生の門出（かどで）になります。その時期を外（はず）さないと駄目です。

それなら……卒業しても、勤めなければ良いのかといえば、勤めないような状態にもっていかないと駄目です。つまり、あと１年ほどであれば……

留年するとか、大学院に進むなど、勉強を継続していれば良いのです。
しかし、経済的理由とかで、無理ということであれば、自分の専攻学問とは関係のない分野に……一旦（いったん）（しばらくのあいだ）勤めて、天中殺の期間が終わってから、本来の専攻分野に再就職すればよいのです。

〔たとえば〕天中殺で卒業して……天中殺で会社に就職したので、本人は辞めようと思いましたけど、会社から辞めないでくれと言われたので、会社に残ったとします。

その場合には、本人が大した出世もしないという程度で勤続して、その程度で済めば良いのですが、身体を壊したとか、交通事故を起こして会社に行けないとか、地方転勤のたらい回しとか、そのような結果がまっています。

それゆえに、天中殺が終わってから〔就職をし直す〕ということが必要です。

☞ 天中殺での入学

大学は専門科目のある学びの場ですけど、自分の人生の目的としなければ、入学しても構いません。

天中殺というのは不思議なもので、天中殺のときに試験を受けると、意外性が出ることがあります。天中殺は、運勢の調整をするために枠（わく）が外れます。

天中殺
↓
運勢の調整
↓
自分の運勢の枠が外れる
↓
だから調整・調節できる

枠が外れるので、こういうときに受験をすると、枠が外れた分だけ意外性が出ますから、まさかと想うようなところに合格することがあります。

そして、小・中・高・大学にいえることですが、天中殺で入学したときは、自分にとって満足でき

ない先生との出会いということもあります。
それは先生が悪いとかではなくて、天中殺のときに入った本人の問題です。
自分にとって満足のいく先生に出会えない、出会わないといえます。

これは、自分の運勢が天中殺（不自然・不完全）という時期に学校に入るわけですから、なにかしらの問題が起きるわけです。
そのなかの一つに、満足できる先生に、出会えないということがあります。

それは自分の運勢がマイナスの局面に遭遇（そうぐう）しているための現象です。

☞ 天中殺は「受け身で物事を進めるのなら構わない」という考え方があります。それは真実か……？

そのなかには「人に誘われたからやる」ということがあります。
〔たとえば〕自分は天中殺なので、Ａさんに誘われてやりました。
そのＡさんは天中殺ではない。という場合には、Ａさん誘われたわけですから、本人は受け身なのでやっても良い。
という気になりますが、やってはいけません。

あるいは、共同で物事を始めるということであれば、単独ではないので、結果として、Ａさんにも迷惑をかけることになります。
「共同でやるような場合」「誘われてやるような場合」は、やってはいけません。
相手にも迷惑をかけますし、自分自身も自ら禍（わざわい）を招くという結果が起こり得るからです。

☙ 天中殺で家を建てる

天中殺で家を造るということについては、まずは自分と家の関係を考えないといけません。
家は自分が住むものです。
（通常、家を建てたら、自分が住んで生涯そこで過ごすことになるでしょうから、そのことを考えます）。

〔たとえば〕登山をするときに、夏なので、冬登山のような重装備でなくて、軽装備で山に登りました。
ところが……だんだんと天候が変化したことで、登山中に大きな気温の変化に見舞われるというような状況になります。
つまり、その状況を家と考えると、その家に住みづらいということが起ります。
それによって、身体を壊す、精神状態がおかしくなるとかです。気持ちが安定しないのです。
それゆえに、天中殺のときの新築・増築はなんとしても、避けて頂きたいのです。
家は自分の生活空間ですから、自分と家族に直接影響を及ぼします。

１日８時間は、家で寝ますし、食事をして過ごしますし、家族との団欒もあるでしょう。
そうしますと、10時間～12時間は家のなかに居ることになります。
２０年住むとすれば、半分の１０年間はその家で過ごすことになります。
それが自分に馴染まなければ大変なことです。

天中殺で建てた家が欠陥住宅の場合は、家を建てたこと（欠陥住宅に遭遇した）で、天中殺による奇禍（きか）をかなり消化できます。
つまり、欠陥住宅は、自分の建てた家が役に立たないわけですから、運勢的にはプラスになります。
プラスになる意味は、欠陥住宅を建てた結果として、自分が身体を壊すとか、身体の具合が悪くなるというようなことが、起こりにくくなります。

また、天中殺のときには、欠陥住宅を購入しやすいとか、建築業者の選定を誤るということもあります。
これも禍です。

☞ 免許を取得する

免許を取るということは、車の乗る、重機を扱うことが目的です。
そうしますと、車に乗る、重機を扱うという目的をはずしてしまえば問題はないのです。

では、天中殺で免許を取得して車に乗ると、どのようなことが起るかと考えます。
買った車に欠陥が起こるとか、欠陥車をつかみやすいとか、あるいは事故を起こしやすいとかです。
そして、免許を取ったのが天中殺ですから、車を運転しても、満足できる状態になれないわけです。
１年のうちに何回かそのような状態があり、そのときに事故を起こすとか、怪我をしやすいのです。
自分が怪我をするだけなら、まだよいのですが、同乗者を事故に巻き込む可能性があります。
そうしますと、大運天中殺の場合は２０年間という長期になります。その場合は、くれぐれも慎重に運転する気配（きくば）りしかないのです。
そして、車に乗りたくない気分の日は、運転しない。その心がけが必要です。

☞ 運勢は自分の考え方で変えられます。

おなじ生年月日の人は、何万人もいるわけです。
その人たちも天中殺です。
その人たち一人ひとりの考え方次第で、さまざまな人生模様ができあがります。
その意味で、運勢は自分の考え方で変えられます。

〔たとえば〕天中殺で免許証を取ってしまった。
もう今さらどうしようもないわけです。
天中殺で免許を取って、運転しているとしたら、「自分は天中殺で免許を取った」ということを、常に自覚して運転するしかないのです。

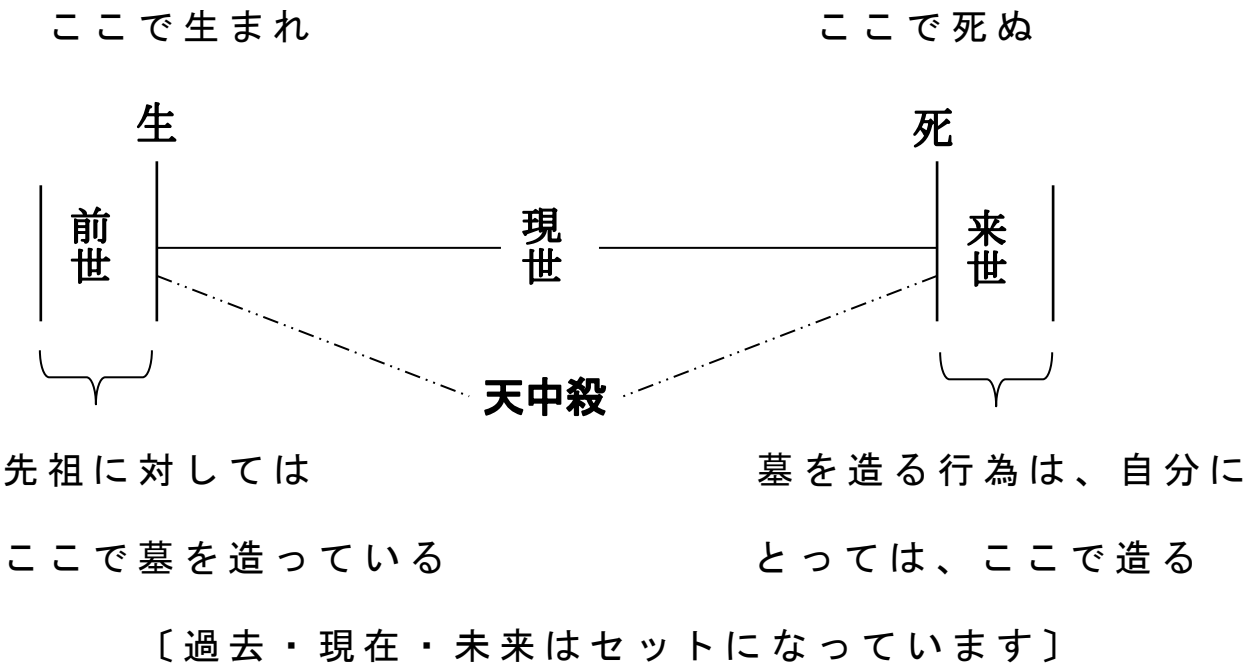
そのように心がけることで、かなり自分の運勢を変えられます。
事故などを避けられる。ということも含まれます。

天中殺の意味を知ることでずいぶんと違います。

算命学は「気の学問」です。

☞ 天中殺でお墓を建てる

ここからは現世（此の世）ではなくて彼の世です。
算命学は、来世があると考えています。
前世がなくて生まれてくる人はいないわけです。



墓を造るというのは、自分にとっての「来世」を造っています。先祖に対しては「前世」で造っています。

“お墓参り”といえば、死んだ祖父・祖母、あるいは死んだ両親に対してであり、自分は関係ないようにおもっていても、自分の墓を造る行為というのは「来世」に対して造るわけです。

天中殺でいろいろと問題が起きるのは「現世の間（あいだ）」だけです。
それゆえに、お墓は自分の天中殺で造っても良いのです。
来世の問題ですから、天中殺は関係ないわけです。

来世のことを、現世の天中殺でしても構いません。
天中殺に来世のことをしても良いのです。

天中殺は、現世に生きている自分……生きている家族に問題が起るのです。

算命学のいう前世（ぜんせ）は「過去世（かこせ）」のことではありません。
「過去世は人間の転生輪廻の過程で生きた現世の時代の意」

中庸学

☞ 天中殺で旅行に行く

天中殺の期間（天中殺に入ったら）は、長期の旅行、ホームステイのような滞在型はいけません。
海外留学は駄目です。

自分のストレスを解消するような短期の旅行なら結構です。（嫌な気分のときは行くことはないですよ）

旅行に行くのは構いませんが、短期の旅行でも、自分から積極的に出かけて行くのは止めたほうがよいのです。
また、自分のほうから「誰かをどこかに誘って」というのも良くないです。

天中殺のときは、自分自身が情緒不安定になりますからどうしても、動きたくなります。
そのなかの一つに旅行があります。

天中殺のときに、命に危険を及ぼす地域へ行ってはいけません。
天中殺はなにが起こるかわかりません。
天中殺は異常であり、不自然・不完全です。

☞ 天中殺で病気になる

病気になるというのは……運勢を調整・調節する過程においての結果としてもなるのです。
病気になったら、回復可能であれば、自分の運勢を調整してくれていると思わないといけません。
また、調節しきれなければ死ぬことになります。
病気はなにかの警告でもあるのです。
病気になるということは、天中殺に限らず、自分の運勢を調整・調節して、悪いものを排出して、元へ戻そうとしている作用と考えています。

天中殺のときに病気になると困ります。
天中殺のときに病気になると、回復したと想っても回復しないのです。これはどの病気にもいえるのです。必ず後遺症が残ります。
大したことのない病気ならよいのですが、天中殺のときに大病して、医者からは「もう大丈夫」といわれて、本人も治ったつもりでも、運勢は回復していませんから、後から再発します。
その意味で、天中殺のときに、大病を患わないようにするしかないのです。

☞ 天中殺で出会う人・出会った人

利害関係をもたなければ、天中殺で出会った人と、友人関係になっても、差し支えないです。
ここの問題は“利害関係”です。

一見して、利害関係がないように見えても、後から利害関係が生ずるということもあります。
その場合は付き合いを避けてください。
あるいは、その人との付き合いを止めます。

また〔なにかを買ってくれ〕とか〔売ってくれ〕とかいう場合には、付き合いを止めます。
利害関係をもたなければ、普通の付き合いをして構いません。
ふつうの付き合いですよ。

☞ 天中殺で死ぬと

現世から来世へと来るわけです。

算命学は、**死人の星〖天極星〗　入墓の星〖天庫星〗彼の世の星〖天馳星〗**の３つに分けています。

①	②	③
死ぬ	墓	彼の世
天極星	天庫星	天馳星

「お墓に入る」というのは、現世と来世の接点という考え方です。

現世に墓はありませんが、死んだ人はお墓に入ります。墓は前世と現世の接点ともいえます。
お墓参りをするというのは、前世あるいは来世の接点にお参りに行くということです。

前世も来世の墓であり、真ん中にある〖天庫星〗は死んだ後(あと)の接点です。
その接点が一般化されているのは、お彼岸の中日です。

お彼岸の中日は、前世と来世の接点が 1 番近づいている所と考えています。それを「お彼岸のお中日」といい、年に２回周って来ます。昼と夜の長さがおなじなのが「お彼岸のお中日」です。

天中殺で死ぬと……〖天極星〗（死んで）⇒〖天庫星〗（墓に入って)⇒ 彼の世へ行く状態が“あいまい”になります。自分の天中殺で死なないで頂きたいのです。

参考・あいまい〔はっきりしないこと〕

【初年】６６回目〖天中殺の心得（４）〗 終わります

【初年】６６回目の授業が最終回です。

55 回目〖天中殺論〗から、天中殺の基礎的な観方を記載しました。天中殺は奥行がとても深いのです。

上級課程に進級される方は、天中殺のさまざまな技法、そして、天中殺の観方を学ぶようになります。

【初年】は算命学中庸・初年度「1年」のカリキュラムです。

長いあいだ、まことにありがとうございました。

受講された皆様に、心から御礼を申しあげます。

算命学中庸は「奥義」も通信で受講できます。

【初年】の上のクラスは【研究専科】です。

中庸院の案内を参照ください。 **算命学中庸〖中庸院〗**